

2026 AUTOBACS SUPER GT Round5 SUZUKA GT 300km RACE



äpr GR86 GT

äpr
Racing Constructor

2026 AUTOBACS SUPER GT Round5 SUZUKA GT 300km RACE

開催地：鈴鹿サーキット（三重県）／5.807km

8月22日（予選）

天候：晴れ コースコンディション：ドライ 観客数：20,500人

8月23日（決勝）

天候：晴れ／曇り コースコンディション：ドライ 観客数：32,000人



混乱のレースを乗り越えて、地元・鈴鹿でつかんだ今季初入賞

第3戦マレーシア大会が延期になったことで、今季4戦目として開催された第5戦鈴鹿。30号車 apr GR86 GTは、2022年の第5戦で3位表彰台を獲得するなど、相性が良いサーキットだ。

というのも、鈴鹿は永井宏明とチームにとってのホームコース。佐橋祐也エンジニアをはじめ、普段はカローラ三重のディーラー整備士であるふたりがメカニックを担当する。地元からの応援は、いつも以上に熱が伝わってくる。

平良響にとっても鈴鹿は思い出深い場所だ。2022年の第5戦鈴鹿では、30号車のステアリングを握りGT300で自身初の表彰台を獲得した。鈴鹿はドライバーズサーキットであるとともに、マシンパフォーマンスも試されるコースでもある。地元であり、思い入れも深い特別な地で、今季初入賞を目指す。

公式練習／7位 8月22日（土）9:45～11:30

公式練習は9時45分にスタート。気温31度、路面温度37度というコンディションでセッションが始まった。

走り出しを担当したのは平良。計測4周目に1分58秒863を記録する。6周でピットに戻ると、GT500車両がトラブルでストップしたことから赤旗が提示された。

およそ15分の中断後、再び平良がコースに入る。7周目にはベストラップに近いタイムをマーク。しかし直後、今度はGT300車両のトラブルにより路面にオイルが撒かれ、それに乗った数台がコースアウト、スポンジバリアへのクラッシュも発生し、2度目の赤旗中断となった。

セッションは23分後の10時45分に再開。ここからは永井がステアリングを握る。2度の赤旗を挟んだ影響で、セッションは11時02分から11時04分までFCY(フルコースイエロー)走行、11時10分から10分間のGT300専有走行という形に変更された。中断によりロングランのテストはできなかったが、永井も平良もフィーリングが良いことを確認。自信を抱き、予選に臨む。

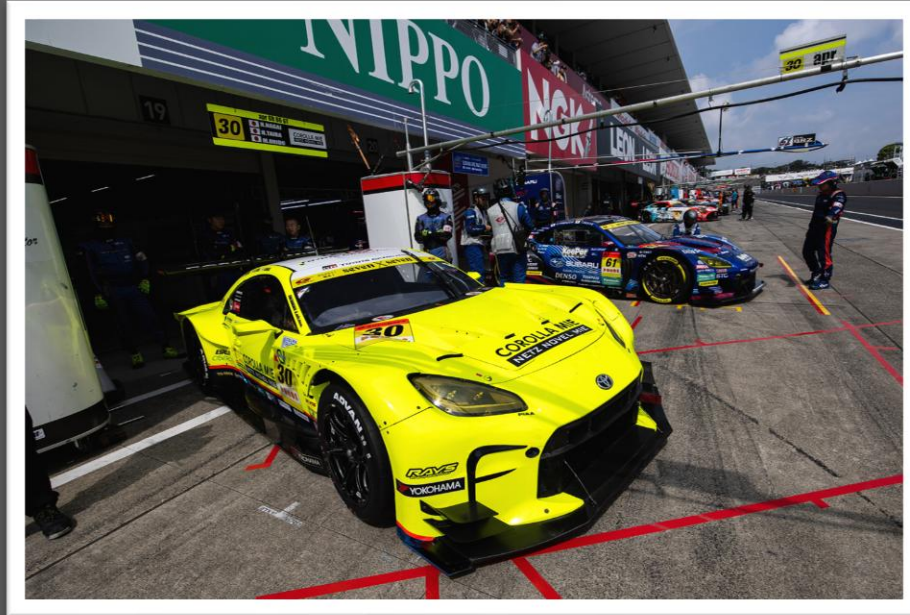


公式予選 8月22日（土）
Q1 A／2位 15:30～15:40
Q2／17位 16:23～16:33

予選Q1はA組に出走。コンディションは気温34度、路面温度46度だった。路面温度は公式練習開始時から10度近く上昇したことになるが、今回持ち込んだヨコハマタイヤは、いずれの温度にも適している。前戦の反省を踏まえて選択したタイヤは、最適解と言えた。

Q1 Aのアタッカーは平良。アウトラップからウォームラップを1周入れて計測3周目にプッシュ。1分57秒780で、タイミングモニターのトップに立つ。平良は翌周もアタックを続け、セクター1・2・4で自己ベストを更新するが、セクター3でコンマ2秒ロスしてしまいタイムアップならず。それでも2番手でQ2進出を果たした。

Q1のA/B上位9台、計18台で争われるQ2は永井が担当。永井もアウトラップから1周のウォームラップを経てアタック。計測3周目に1分59秒755を記録し、翌周には1分59秒670に更新。プロドライバーによる激しいアタック合戦のなか、17番グリッドを得た。





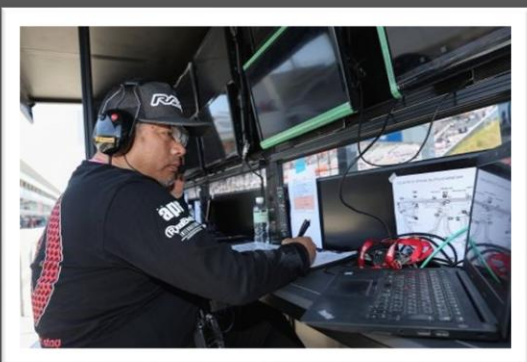
永井宏明選手

「公式練習のはじめは少し乗り難いところもありましたが、アジャストしていくなかで改善できました。予選はクルマもタイヤもフィーリングがすごく良くて、良すぎたがゆえにアクセルを早めに踏んでしまい、ドライビングでミスがありました。アタックは非常に悔いが残ります。前戦で入れた空力のアップデートも、フロントのダウンフォースが増えていて、セッティングに応じてその通りに反応してくれました。明日は17番手からのスタートですが、たくさんの応援を力に変えて、少しでも前に行けるようにしたいと思います」



平良 響選手

「持ち込みのタイヤは、ひと言で言うと『バッチリ!』でした。予選はウォームアップを1周にするか2周にするか悩んだのですが、1周目のウォームでグリップが来ていると思ってアウト、ウォーム、プッシュにしました。アタックとしてはうまくとめられたのですが、翌周もグリップが高かったので2アタック目に入り、でもセクター3でリヤタイヤのピークグリップが落ちてしまっていて、セクター4は気合いでタイムアップしましたが、トータルではタイムを更新できませんでした。公式練習でロングランをテストできていないのは決勝に対して未知数ですが、今回のタイヤなら問題ないと思います」



金曽裕人監督

「前戦富士でのタイヤ選択ミスを踏まえ、佐橋エンジニアがヨコハマタイヤさんと協議して、今回は自信を持ってタイヤを持ち込みました。実際、予選ではタイヤもクルマも素晴らしいパフォーマンスでした。永井選手のQ2は、少し行き過ぎてしまいましたけどナイスドライでした。1分58秒台も狙えるくらいクルマもタイヤも決まっていたことで、ちょっと気負いすぎたのかも。決勝に対してのタイヤのライフを判断することはまだできないですが、平良選手のQ1タイムを見てもパッケージとして正しい方向に進めていることを感じているので、自信を持って挑みます!」

決勝レース（48周）／12位 8月23日（日）13:37～15:24

決勝前、12時00分から12時20分に設定されたウォームアップ走行では、まず永井がステアリングを握った。20分間ではロングランをテストすることはできないが、決勝セッティングを確認、好感触を得て5周でピットに戻り平良と交代。平良はその後、このセッショントップとなる1分59秒344をマーク。手応えを感じつつ、決勝に臨む。

第1スティント担当は永井。気温34度、路面温度49度の暑さの中、レースがスタートした。17番グリッドから永井は密集を潜り抜けていくが、NIPPOコーナーでスリーワイドになり、アウト側にいた30号車は左ドアに接触されてグラベルに押し出されてしまう。永井はグラベル上でのストップを回避したが、28番手に後退。その後、最後尾まで落ちてしまった。

ポジションを失った永井ではあったが、その後はハイペースで前車を追いかけていく。11周目には1台をオーバーテイク。さらに前走車でコースアウトが続き、15周目にFCYが導入されたときには25番手までポジションを戻した。そしてFCY明けの翌周、ルーティンピットに入る。

チームは給油とタイヤ交換を素早くこなし、平良をコースへと送り出す。レースは全体的に荒れた展開となり、ペナルティやコースアウトが続く中、平良は持ち前の速さを発揮。22周目にはオーバーテイクも決めて22番手に浮上した。そこからは同じGTA-GT300車両でキャラクターが似ている25号車 HOPPY Schatz GR Supra GTをなかなか抜けない状況が続いたが、36周目にGT500と絡んだタイミングを見逃さずに抜き去り、この時点で入賞圏内にあと一步の16番手にポジションアップした。

平良のペースは落ちることなく、追い上げを図る。レースはその後荒れた展開が続き、前走車がトラブルやアクシデントで戦線を離脱する中、41周目には14番手で僚機の31号車 apr LC500h GTの背後に迫った。だが、42周目にGT300車両によるクラッシュが発生してセーフティカー(SC)が導入されると、車両の回収とコースの修復に時間を要し、SC先導のままレースは終了した。

結果は12位。サバイバルレースとなった過酷な戦いを乗り越え、30号車は今季初入賞を果たした。次戦SUGO、そしてオートボリスは鈴鹿とサーキット特性が似ているコース。今大会で得た手応えと自信を糧に、apr GR86 GTは連続入賞に挑んでいく。





永井宏明選手

「序盤、接触されてからのコース外に押し出されポジションを落としたのは展開的に悔しい結果となりました。入賞でポイントは獲得でき嬉しいのですが、やはり予選でもう少し前に行けていればアクシデントも回避できたかもでした。駆けつけて下さった沢山の応援団のおかげで、車もタイヤも非常にバランス良く、パッケージは今季最高の仕上がりでした。次の菅生戦もこの流れをキープして挑みますのでご期待ください」



平良 響選手

「決勝前のウォームアップは、決勝シミュレーションでガソリンを満タンにして走りましたが、フィーリングはすごく良かったです。決勝の第2スティントも乗り始めから良く、序盤は前方がクリアで自分のペースで走れたので、そこでタイムを大きく稼げました。25号車はタイヤもクルマも似た特性で抜けない状況が続きましたが、GT500が絡んで失速した隙をついて一発で仕留められたので、良いオーバーテイクができたかなと思います。もっと上位を狙えたとも思いますが、ポイントを獲得できたことに加え、良いタイヤとセットアップが見つかったのが今後に向けて大きな収穫になりました」



金曽裕人監督

「中国からのスタートになると、やはり混乱に巻き込まれるリスクは高くなりますね。でも、グラベルに埋まってレースを終えることにならずに良かったです。その後の永井選手の走りも、ペース良く追いつけてくれました。後半スティントの平良選手は完璧でした。失ったタイムもポジションもリカバリーしてくれて、永井選手も平良選手も楽しめたレースになったと思います。最後は31号車に迫りつつSC先導で終了しましたが、うちのチームは同僚同士でも勝負していいよと話しています。あのまま戦い続けたらどうなっていたか、見てみたかった気持ちもありますね。この先は、ポイントを確実に獲るレースを続けていきます!」